
幻想を見た少女の涙。

だらぼの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想を見た少女の涙。

【Nコード】

N0448Z

【作者名】

だらぼの

【あらすじ】

——聖なる夜の日、私は事故で死にました——漫画のような死に方でこの世を去った少女。これは死んだ少女が見た幻想話。ただの自己満足作品ですので、温かい目で見てください。

プロローグ：事故

小さい頃、私は事故に遭ってしまいました。

子猫が車道に飛び出し、助けようとしただけなのです。

黒く、大型車なのを覚えています。

世界が灰色になると、車から人が出てきました。若い男です。

男は私を見ると、悲鳴をあげ、そして——車を走らせ、逃げてしまいました。

残された私は、痛みを感じながら、灰色の世界の中に埋まってしまいました。

12月25日。聖なる夜のことでした。

そして、私は死んでしまいました。

あの時はまだ、17歳でした。

1話目：赤ん坊

気がつくと、そこは真っ白なベッドの上だった。

家具も白、服も白、壁はもちろん白。

誰の部屋か分らない。・・・誰の部屋？

ベッドから出て、辺りを見回す。

暖かい毛布に包まっていたせいか、床が酷く冷たく感じられる。

扉を開けようとすると、ノックの音がした。

きつと、部屋の主だろう。

私がいるから寝れなかったんだろう。申し訳ないことをした・・・。

謝っと思ったほうが良いだろうか。

私はそう思い、扉を開ける。

「!?!?」

扉を開けたとき、驚いた。

目の前には小さな赤ん坊がいたのだが、その赤ん坊は顔を隠すようにフードを被り、何食わぬ顔で部屋に入ってきたのだから。

入ってきた赤ん坊は、机から何かを取り出し、私の手に置いた。

——ストラップの兎と猫だった。

「?????」

私が疑問を抱えた顔をしていると、赤ん坊は答える。

「君が忘れてたもの。返しに来たよ」

赤ん坊はそう言い、付け足す。

「金はもうからね」

『ありがとう』

そう言おうとした。が、

声が出なかった。

「————? ? ? ? ?」

「どうしたんだい？」

質問されても、答えようがない。

私は静かに首を横に振る。

「・・・そう」

そして、赤ん坊は去っていった。

私は部屋のあらゆる引き出しを開け、紙がないかと探す。

「・・・」

あった。

中に数枚絵が描いてある。

上手とは言えないが、丁寧に描いてある。

私は絵を千切り、スケッチブックを持って部屋を出た。

2 話目：個性豊か

一階には、沢山の人がいた。

さっきの赤ちゃんの隣には王冠を被った人、髪の毛の長い人、言っちゃ悪いけどオカマみたいな人、髭の濃い人。そして、真ん中には顔に幾つもの傷がある人がいた。

そして、ちょこちょこさっきの赤ん坊が私の元へ来て、引っ張るように真ん中の人の下へ連れて行かれる。

「ボス、連れてきたよ」

「・・・」

言われても黙ったままで、私を見据えている。

「・・・【何か御用でしょうか？】」

スケッチブックにそう書き、見せる。

すると、周りの人たちがこう言った。

「姫って声出なかったっけ？」

「あんまり喋る子ではなかったけど・・・ちゃんと出てたわよ？」

「じゃあなんでスケッチブックに書いてんだあ？」

髪の毛の長い人がそう言ったとき――

ガシャンッ

目の前の人髪の毛の長い人にグラスを投げつけた。

「うゝおゝおゝおゝおおい！！何しやがんだクソボスう！！」

突然の大きな声で、肩がビクリと跳ね上がる。

「・・・るせえ」

「そうだよ。アクアが怖がってる」

「・・・チッ」

イラついた調子で舌打ちすると、部屋から出てしまった。

「・・・【すいませんん】」

「別にいいっての。アイツの声がでかいだけだし」

王冠を被った人が、笑いながら答える。

彼らにとっては日常茶飯事にちじょうさはんじなのだろうか？

そう思っていると、オカマの人が言う。

「ボス、アクアちゃんに聞かないでいいのかしら？」

「・・・」

「・・・【何をですか？】」

「ん〜つとねえ・・・」

チラリと傷のある人を見ると、こう続けた。

「正直に答えてちょうだい。・・・私達のこと覚えてるかしら？」

「はあ？オカマ、おまえ何が言いたいんだよ？」

王冠の人がオカマの人に怒った様子で聞く。

「ベルちゃんは黙ってて」

「・・・【すいません。覚えてないです】」

正直に、そう書いて見せた。

「!!??」

「やっぱり・・・」

「おい・・・どういうことだよ・・・」

「アクアちゃんにあの任務はキツかったかしら・・・」

「？任務？」

「ちよつと・・・ね・・・」

王冠の人はだいぶ混乱しているようだ。

私は何故関係あるのかは知らないが・・・。

「・・・おい」

「！【なんでしょうか？】」

顔に傷のある人が突然声をかけてきたので、多少驚く。

「おまえには明日話す。今日はもう寝ろ」

「【ですが・・・】」

続きは書けなかった。

なにせ、あの目でギロリと睨みつけられたら、反論は出来ないだろ

う。

私は次のページに、【分かりました】とだけ書いて部屋を出た。

途中、「姫!」と言われたような気もした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0448z/>

幻想を見た少女の涙。

2011年12月2日20時46分発行